

松村謙三物語

まつむらけんそう

郷土に尽くした偉人

農地改革と日中友好に努めた



松村謙三銅像(刀利ダム)



松村謙三生家(福光町)

ご挨拶

全国に誇るこの素晴らしい散居景観は、一朝一夕に出来たものではなく、雄大な自然の恩恵と、そこに生きた先人の生活・知恵・努力が創ったものであると言っても過言ではないと思います。

特に、砺波平野を形成してきた庄川を中心とした水は、その大部分が小矢部川に流れ込み、富山湾へそそがれていたのであります。

小矢部川の上流・中流部の開発は、砺波平野の安定は勿論、現在のような素晴らしい散居景観の形成にも大きく影響したものと思われまます。

そこで、現・南砺市一帯の農地改革を始め、国会議員として日中友好の架け橋としても活躍された松村謙三先生の郷土に貢献された素晴らしい業績と、国会議員として活躍された人生と人間性を感じとっていただければ幸いです。

となみ散居村ミュージアム館長

目次

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 ● 松村謙三先生 略年譜 | 9 ● 白中ダムの概要 |
| 2 ● 河合良成 略年譜 | 10 ● 碑文 |
| 3 ● 松村謙三をしのぶ | 11 ● 松村謙三先生のことば |
| 4 ● 松村謙三をしのぶ | 12 ● 松村謙三と蒲焼き |
| 5 ● 日本と中国の友好関係を目指す | 13 ● 偉大な越中人、松村謙三先生 |
| 6 ● 戦後の農地改革を実行 | 14 ● 偉大な越中人、松村謙三先生 |
| 7 ● ダムの建設に尽くした | 15 ● 刀利村の史話 |
| 8 ● 小矢部川と刀利ダムの概要 | 16 ● 福光木工業の将来にかけた人 |

松村謙三先生 略年譜



松村謙三家(福光町)

西暦 和暦 内容

明治

1883年 明治16年 • 1月24日福光町新町(現:南砺市)で生まれる。

1902年 明治35年 • 早稲田大学入学

1906年 明治39年 • 報知新聞社入社

大正

1912年 明治45年 • 家業の薬屋を継ぐ

1918年 大正7年 • 刀利ダム建設の志を抱く(当時町議会議員)

1919年 大正8年 • 富山県議会議員に初当選

1928年 昭和3年 • 衆議院議員に当選(第1回普通選挙)44歳以降、昭和42年まで連続13回当選をする。

昭和

1929年 昭和4年 • 農林大臣秘書官

1932年 昭和7年 • 農林参与官

1939年 昭和14年 • 農林政務次官

1945年 昭和20年 • 東九邇宮内閣に入閣、厚生大臣、文部大臣。幣原内閣に入閣、農林大臣として第一次農地改革を手掛ける。

1953年 昭和28年 • 改進黨幹事長

1954年 昭和29年 • 日本民主党政務調査会長

1955年 昭和30年 • 第二次鳩山内閣に入閣、文部大臣、自由民主党顧問

1957年 昭和32年 • 石橋湛山首相の個人的特使として東南アジアの訪問

1959年 昭和34年 • 自由民主党第6回党大会で、繰り上げ総裁選、岸信介と争い320対166で敗れる。中華人民共和国訪問、周恩来首相と話し合う。以降1962年、1964年、1966年、1970年にも訪問をする。

1960年 昭和35年 • 刀利ダム工事着手

1962年 昭和37年 • 欧州共同市場を視察

1964年 昭和39年 • 勲一等旭日大授章親授

1966年 昭和41年 • 福光町第1号名誉町民決定

1967年 昭和42年 • 4月刀利ダム完成

1969年 昭和44年 • 9月次期衆議院選挙不出馬を表明、政界を引退

1971年 昭和46年 • 8月21日死去 享年88歳、従二位勲一等旭日桐花大授章受章

1972年 昭和47年 • 中国と国交回復(田中角栄首相調印)

～松村謙三先生を支えた～

歴史資料

河合良成先生 略年譜



河合良成

西暦 和暦 内容

明治

1886年 明治19年 ● 5月福光町新町(現南砺市)の造り酒屋の長男として生まれる。

1904年 明治37年 ● 高岡中学校卒業(第3回生)正力松太郎氏と同級。松村謙三氏は3年先輩。

1907年 明治40年 ● 第4高等学校卒業在校中、西田幾太郎氏の三々塾入塾

1911年 明治44年 ● 東京帝国大学法学部政治科卒業、農商務省商務局の監理課(現大蔵省)で取引所監督担当(25歳)

大正

1915年 大正4年 ● 米価調節私試発表、米価調節委員会委員

1919年 大正8年 ● 米騒動の責任を取り寺内内閣総辞職、依願退職

1920年 大正9年 ● 東京帝国大学経済学部、農学部講師、取引所論講義

1924年 大正13年 ● 取引所辞職、日華生命保険常務取締役

昭和

1934年 昭和9年 ● 帝人事件で検挙される。200日間の獄中生活

1939年 昭和14年 ● 満州国総務庁の経済顧問

1942年 昭和17年 ● 東京市助役

1944年 昭和19年 ● 木造船建造本部長、運輸通信省海運総局船舶局長

1945年 昭和20年 ● 農林大臣松村先生の懇請を受け農林次官となる。

1946年 昭和21年 ● 3月貴族院議員に勅撰
5月第一次吉田内閣の厚生大臣(昭和22年公職追放)

1947年 昭和22年 ● 小松製作所の100日スト、3時間で解決、社長辞任

1951年 昭和26年 ● 経済団体連合会常任理事

1952年 昭和27年 ● 第25回衆議院議員選挙に当選

1953年 昭和28年 ● 吉田首相のバカヤロウ発言で解散 政界を離脱

1962年 昭和37年 ● ソビエト経済使節団長として第1回訪問

1964年 昭和39年 ● 小松製作所取締役会長

1965年 昭和40年 ● 高岡市名誉市民

1970年 昭和45年 ● 福光町名誉町民

1970年 昭和45年 ● 5月14日 死去 享年84歳、従三位勲一等瑞宝章受賞

農地改革と日中友好に努めた

松村謙三

まつむら
けんそう

物語

～次代を読み志貫く～

歴史資料

松村謙三をしのぶ

「松村謙三」氏が不帰の人となったのは、昭和46年(1971年)の8月21日である。この世を逝った故人の生涯は今も光を放っている。

ここに、「松村謙三」の政治家としての業績を取り上げ、次代へつなごう。

- ◇終戦直後、幣原内閣時代の農相としての「農地改革」への道筋を実行
- ◇晩年に政治生命をかけた日中国交回復の礎を築く。

1. 「農地改革」に取り組む

「農地改革」は、小作人を自作農にするという戦前の制度を撤廃する大改革である。

先祖伝来の田畑を手放さなければならないという地主側にとっては、生活権にも関わる屈辱的なことであった。

松村家は、葉種業を生業としていたが、多くの小作人をも擁した大地主の家柄でもあった。

地主の胸中を誰よりも理解しながら、大多数の農民にとって福音となり、かつ、民主主義の確立の為には欠かすことのできない施策と信じた松村は、個人の感情を抑え大局的な観点に立って、孤軍奮闘の末「第一次改革案」をまとめ上げた。間もなく松村は、公職追放令のために農相を辞任したのである。

その後の作業は、GHQの指示を取り入れながら、「松村案」を骨子として「第二次改革案」が断行された。



松村謙三氏銅像

松村の業績である「農地改革」については、彼が終生、寡黙を通したことはよく知られている。それは、多数の幸福の為に奉仕したものの、その陰にあって、少数とは言え犠牲になった地主達の「痛みを忘れまい」とした心配りであったと思われる。

2. 「日中友好」に務める

日中友好協会会長であり、周恩来総理の右腕と目された「廖承志」(りょうしょうし)は、青年時代に日本に留学し、松村と同じ「早稲田大学」を卒業した親日家であった。以来、「廖」との親密な関係のもとに松村は、5回にわたる訪中を成し遂げ、その都度、周恩来と対談を重ねてきた。

3. 「日中の国交回復」に努力

「日中の国交回復」は、松村が内心に秘めてきた念願の事項であった。日華平和条約に固執して、新生中国をことさらに無視してきた、時の首相の「岸信介」に、松村は、敢然と反旗を翻し、昭和34年(1959年)1月、自由民主党総裁選に立候補した。

最初から勝敗は分かっていたが、「アジアの平和と国民の信頼を得る政治」を立候補の弁に掲げた松村に、予想を越えた3分の1以上の票が投じられた。

この決戦を機に、松村は、政界を引退する86歳まで、全身全霊を捧げて、国交回復に尽くした。

4. 「松村謙三」の不退転の決意

時代を先読みした松村の政治活動は、当時の外務省や政界が理解できず、冷淡であった。

しかし、松村は、日中両国の友好がアジアの平和の構築につながるものと信じ、不退転の決意で、海を越え、胸襟を開きおもねる事無く対等に語り合ったのである。

周恩来は、そうした松村の覚悟に心打たれ、深い信頼を寄せたのである。

内外の厳しい情勢にもかかわらず、両国の貿易が再開され、新聞記者の相互の常駐等が実現したのも、松村と周恩来の間に培われた友誼(ゆうぎ)がもたらしたものであった。



松村先生と中国蘭

5. 「井戸を掘った人」それは「松村謙三」氏

世界は、極秘の内に対中傾斜に大きく舵を取ることになる。

アメリカ大統領「ニクソン」の電撃的訪中予定が報道されたのは昭和46年(1971年)7月15日で、「松村謙三」の死のおよそ1ヶ月前のことであった。

病床で、この米中和解のニュースを知った松村は、政治家として自分の歩いてきた道が正しかったことに満足し、瞑目(めいもく)したに違いない。

翌年、予告どおり、ニクソンは日本の頭越しに訪中するのである。

「田中角栄」首相が、押っ取り刀で中国に出掛け、日中国交正常化が実現したのは、周知の通り「松村謙三」こそが「井戸を掘った人」であったと述べた。

「松村謙三」は、最後まで、清廉潔白な政治家であった。

6. 昭和44年(1969年)9月

政界の引退を決意した「松村謙三」に、後援会は、後継者として彼のご子息に求めたが、松村は世襲を肯(がえ)んじなかった。

後に、長男である「正直」(まさなお)は、感慨を込めて「選挙区の多くの人達と一人の議員とが、40年間奏で続けたこの世ならぬまでに美しい交響楽は、(中略)新しい伝説として、郷土に残るといのが最も自然な姿であろうか」(昭和52年「花好月円」)と語っている。

この父にして、この子ありであった。

～日本と中国の友好関係を目指す～

歴史資料

松村謙三 まつむら けんそう

中国との国交回復の扉を開く

太平洋戦争の後、日本は、アメリカと条約を結び関係を強めてきました。

一方、中国とは対立している台湾を尊重し友好姿勢をとりました。このため中国は日本をよく思わず、両国関係は悪くなって行きました。

松村謙三は、日本と中国は昔から長く深い交流を続けてきた事や、中国が広い国土と、豊富な資源を持つ大国であることから、中国と仲良くして行かなければ、アジアに平和は訪れないと考えていました。

そこで、謙三は、中国との友好関係を復活させるため、政府の反対を押し切って、取り組みを始めました。

1959年(昭和34年)、76歳の時、謙三は、中国を訪れて周恩来首相と話し合いました。

中国人の日本に対する不信感は根強いものがありましたが、5度も中国を訪れているうちに、謙三の信念と人柄に打たれ信用してくれるようになりました。

1972年(昭和47年)、日本の田中角栄首相が中国を訪問し、国交が回復することになったのです。しかし残念なことに、謙三はすでに、この前年に亡くなっており、この事実を見届けることはできませんでした。

富山県と友好協定の締結

中国は、謙三の出身地である富山県に親しみを感じており、中国の遼寧省と富山県は友好協定を結んでいます。今も盛んに交流が行われています。



周恩来首相と松村謙三

～戦後の農地改革を実行～農村・農民を救う

歴史資料

松村謙三 まつむら けんそう

農村・農民を救いたい

松村謙三は、県立高岡中学校(現:県立高岡高校)から早稲田大学の政治経済学科へ進学した。この大学は、謙三が子どもの時から尊敬していた政治家の「大隈重信」(おおくましげのぶ)がつくった大学です。ここで、謙三も政治家としての道を志すようになったのです。

謙三は、日本の農業を心配し、卒業論文で次のように述べている。

「現在の農村を救うには、社会の制度を改めなければならない。」と

卒業後は、新聞記者として就職し、活躍しましたが、1912年(明治45年)に父親が死亡したため、新聞社を退職して、家業の薬屋を継ぐのです。

その後、福光町会議員を経て富山県議会議員になりました。

この間、謙三は、福光町に図書館をつくったり、耕地を整備する稼業や県立福光高等女学校(現:県立南砺福光高校)の創設に貢献しました。

農地を地主から小作人の手へ

謙三は1928年(昭和3年)衆議院議員選挙に立候補し、初当選しました(45歳)。次いで1945年(昭和20年)に農林大臣に就任しました。

戦争に負けた日本は大変な食料不足になり、これを解消するために、謙三は「地主制を解体して、地主が持つ農地を小作人に分け与える「農地改革」を進め、1945年(昭和20年)10月、第一次改革だけでは不十分だとし、更に改革を進めるよう」指示しました。

これを受けて、政府は1946年(昭和21年)10月、第二次農地改革を決め実施したのです。この結果、自分の農地を耕す自作農が一気に増加したのです。



農地改革記念碑(福光町中央公園)



※資料提供: 富山県教育委員会「ふるさと富山の人物ものがたり」より

ダム建設に尽くした人～松村謙三～

歴史資料

刀利ダムの建設



松村謙三銅像(刀利ダム)

小矢部川を上流へさかのぼると、石川県の県境近くに、雄大な「刀利ダム」が姿を現す。これは小矢部川唯一のロックフィル式ダムで、昭和42年(1967年)に完成したものである。このダムの傍らには、「松村謙三」の銅像(胸像)が建立されている。

「松村謙三」(1883～1971)は、長い政治活動の中で、厚生大臣、農林大臣、文部大臣を勤めた政治家で、今にも語り継がれている清廉潔白な政治姿勢であった。

特に、農地改革、日中国交回復の正常化などにも大きな功績を残された。

小矢部川上流に建設された「刀利ダム」も又松村謙三の大きな功績の一つである。

干ばつと水不足により、小矢部川筋では水争いが繰り返されてきた。それに対して、農民のやむにやまれぬ争いに心を痛めてきた松村謙三は、大正7年(1918)町議会議員の時、小矢部川源流を調査しダム建設に志を抱いた。

ダムの建設が決定すると、湖底に沈む刀利村集落では、田畑を耕し、林業で生計を立てていた人々の猛烈な反対運動が起こった。

松村謙三は、自ら何度も足を運びダムの必要性を説いた。謙三のこの熱意にたいして、ついに、刀利村の人々はダムの建設に同意したという。

「刀利ダム」は、昭和42年(1967)4月に完成した。完成まで、約50年に近い歳月をかけた構想の実現であった。

松村謙三は、さらに、庄川合口ダムの建設や砺波平野の農業用水の改修にも力を尽くした。



刀利ダム



刀利ダム湖(渇水期)



刀利ダム赤壁

小矢部川と 刀利ダムの概要



刀利ダム全景

小矢部川は、県下五大河川の一つであり、富山・石川県境の大門山(標高は1.572m)に源を発し、途中、打尾川、山田川及び子撫川等を合流しながら県西部を北流し、富山湾に注ぐ、流路延長68km、流域面積667km²の一級河川である。

刀利ダムは、豊富な融雪水を貯留し灌漑用水の補給、洪水調節及び発電を目的とする多目的ダムとして、国(農林省)により建設されたものである。

昭和29年(1954年)に予備調査が開始され、昭和33年(1958年)より全体実施設計を経て、昭和35年(1960年)から建設事業に着手し、昭和42年4月に完成したのである。その後昭和42年10月から富山県に管理委託されています。

このダムの完成により、下流耕地3,780.3haの灌漑用水が確保されると共に、発電及び流量調節(最大450m³/S)を行うことにより、下流の洪水被害が、大きく軽減されダムの使命を遺憾無く発揮しています。

刀利ダムの構造は、重量式コンクリートダムとアーチ式ダムを組合せた複合式ダムという珍しい型のダムである。

また、刀利ダムは県内有数の規模を誇り、周辺には、青年の山研修館や長瀨峡、大門山への登山道等があり、県民の憩いの場となっている。



小矢部川の流れ



刀利ダム記念公園

打尾川と 白中ダムの概要

小矢部川支川である打尾川は、三方山（標高1,142m）を源として、途中急峻な山地を流れ、南砺市福光町嫁兼地内で小矢部川に合流する流域（25.2km²）の中小河川である。

この河川は、急流部上断面が小さいことから、洪水時には破堤し、下流農地の作物にしばしば被害を与えてきました。

この地域の灌漑用水の確保は、昭和33年（1958年）から昭和42年（1967年）に実施された「刀利ダム」の建設を軸とした「国営小矢部川農業水利事業」によってなされたが、事業計画後、20年以上の歳月を経て、農業の体質は大きく変化し、灌漑用水の利用形態にしても大きな影響を及ぼしました。

この変化に対応するためにさらなる灌漑用水量の増加と高度な管理が必要となってきました。

以上の問題を解決するために、富山県農地林務部では、県営灌漑排水事業・防災ダム事業として、昭和52年（1977年）より着手し、平成5年（1993年）には「白中ダム」本堤が完成しました。

このダムの完成により、下流部農地4,354haの灌漑水量の確保と小矢部川支川「打尾川」の洪水による農業関係被害想定区域の農地1,144haの被害が防止されました。

また、地域内の主要灌漑施設の維持管理費を節減し、農産物のコストの低減を図るため、ダム直下に取水施設を利用して、水力発電施設を平成10年（1998年）に設置し、電力を供給しています。

白中ダムの構造は、中心に粘土のコアを持つ中心遮水ゾーン型ロックフィルダムで、良質の土砂、1,212千m³を盛り立て築堤し、表面に石張りを施したものです。

ダムによって出来た湖は、29.5haで、総貯水量は6,950千m³になり、その内利用できる有効貯水量は、6,070千m³で、この分を使って灌漑や、洪水調整が行われています。



白中ダム(ロックフィルダム)



庄川合口用水20周年記念

松村謙三先生揮毫～碑文～

庄川の各用水取り入れ口は

左岸に、山見八ヶ、二万石、舟戸口、鷹栖口、若林口、新又口、千保柳瀬口
右岸に、三合新、芹谷野、六ヶ、針山、中田口 …の12用水が開けていた

しかし、その施設に年々多額の費用を要し、しかも取り入れ口堰の流失や早魃の被害が甚だしかったので、遠く藩政時代から合口による適正な配水を企てていた。

大正の初め、小牧、祖山の高堰堤造計画が具体化したのに刺激され、合口の気運が熟し、期成同盟会が中心となり、関係機関あげて実現に努力した。

ことに用水の落差を利用し、発電を行うことは当時として画期的な大事業であり、幸いに、国、県などの助成を得て、昭和5年起工式を挙げ、同16年堰堤を完成し、その他関連施設を含む県営事業として、17か年の歳月と総工費390余万円を投じ、灌漑面積12,000ヘクタールに及ぶ壮挙は全く成り、宿年の大成は成就された。



松村謙三銅像(刀利ダム)

今や庄川の天与の恩恵を受けるわれわれは、
永遠にこの偉業を讃え、共栄の道を歩みたい。



庄川合口ダムの謙三の碑文



歴史資料

～人生の指針に～

松村謙三先生のことば

「松村謙三先生のことばを人生の指針に」

松村謙三先生は、政治家として、また、高潔な人格者として、講演をよく依頼されていました。特に、青年層や学生層からの講演や集いには、積極的に出席されていました。

ご自身の豊富な経験や、知識を次代を担う若い人達のために、というお考えの故であったと思われま

す。早稲田大学卒業後、新聞記者を志し、母校の創設者「大隈老侯」に、ご挨拶にいかれた時、

老侯曰く「昔、孔子は一を聞いて十を知るといわれたが、新聞記者になるためには、一を聞いても、百や二百も知らなければだめだ」と言われたという。

つまり、新聞記者としての要諦は、記憶力と推理力が必要であると言う意味である。

松村謙三先生は、若い人達の集まりには、このお話をよくされた。広く若い人達に一つの処世訓としてされたのである。私にとっても、この話は、大変有意義であり、会社経営の指針にも、自分の人生指針にも大いに役立てており、今後も活用し、後輩にも伝えていきたいと思っている。

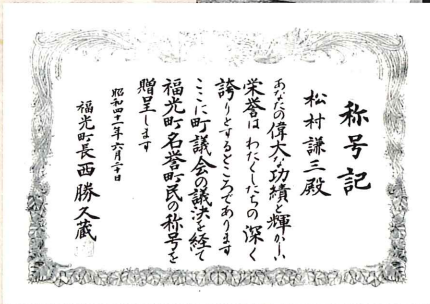
(上埜健太郎 談)



松村謙三



名誉町民賞受賞



称号記

松村謙三殿
あなご偉大の功績と輝かしい
栄誉はわたくしらの深く
誇りとするところでありま
す。ここに町議会の議決を経
て福光町名誉町民の称号を
贈呈します。
昭和三十一年六月廿日
福光町長西勝久蔵

※資料提供:上埜健太郎氏より=当時の秘書

～福光の郷土食～

歴史資料

松村謙三氏と「蒲焼き」

小矢部川の養殖事業は、明治31年(1898年)が最初である。県水産会によって、鮭、鱒、鯉の稚魚が放流された。

昭和12年(1937年)からは、琵琶湖産の稚鮎が放流され始めた。

昭和27年(1952年)からは、虹鱒(にじます)、鮎(あゆ)、鯛(うぐい)、鯉(こい)の稚魚の放流が行われた。

福光の水産加工品として有名なものに「蒲焼き」(かばやき)がある。

福光蒲焼きの歴史はいつ頃からであるか明確ではないが、明治20年頃にはもう「蒲焼き屋」があったことが、松村謙三の随筆「故郷の食味」の中で書かれている。

松村謙三氏の随筆「故郷の食味」から

「鱈(どじょう)の蒲焼きも、小児の時には美味かった。私の隣の庇(ひさし)の下に屋台を組んで、甚助という老翁が蒲焼きを焼いて業としていた。今から思うても、余程上手であったようである。特に当時は、まだ田圃に硫安・過りん酸などの化学肥料をまかない頃で、大きな鱈(どじょう)や田螺(たにし)が沢山いた。幅の大きい小鰻のような蒲焼きは実に見事であった。」

「蒲焼き」は、現在も福光の郷土食として、名物の一つとなっている。昭和13年(1938年)の蒲焼きの販売総額は3400円であった。



農地改革と日中友好に努めた

松村謙三

まつむら
けんそう

物語

歴史資料

～偉大な越中人～農地改革を断行した

松村謙三先生

「松村謙三」の概要

松村謙三は、明治16年(1883年)1月27日、西砺波郡福光町(現:南砺市)の素封家に生まれた。祖父の清治、父の和一郎など政治に関心を持つ人々が周りに多く、政治家の出入りも多かった。

明治35年(1902年)高岡中学を卒業し、早稲田大学政治経済学科に入学した。

それは、幼い頃からの彼の身边的人々の影響で、「大隈重信」(おおくましげのぶ)への尊敬の念が心の中におのずと醸成していったからである。



大正8年(1919年)、富山県議会議員に選ばれ、昭和3年(1928年)に衆議院議員として国会に登場するのである。時に45歳であった。

翌年、浜口雄幸内閣が成立した。

その時の農林大臣が、町田忠治(戦後の日本進歩党総裁)であった。

町田は、松村に農林大臣秘書官に就くことを懇請した。

この時の「松村謙三」の心の内を探ってみると

「郷里の砺波地方一帯の耕地整理問題や小矢部川を取り入れ口とする用水問題などが未解決のままであることなどが脳裏をよぎり、これからは国という立場で、農政に取り組む務めが、自分に与えられた使命であると思ったのであろう。」

次いで、松村は、齊藤実内閣の農林参与官、平沼騏一郎内閣の農林政務次官を務めた。これら三つの官職を機に、米穀委員会や戦時中の食料管理委員会など、農林省関係の多くの委員を務めた。



※資料提供:越中人譚より 神島達郎氏の資料より

昭和20年(1945年)10月、終戦処理が終了し、幣原喜重郎内閣が成立し、農林大臣に就任した。この時、農林政務次官に同郷の河合良成を迎えようと、打診したのが正力松太郎であった。河合良成は快諾した。

「松村謙三」の「農地改革断行への想い」

「戦時下の圧迫された気分を元の農民の心に戻すのが農政の根本である。例えば、小作制度を廃止し、多くの自作農を創設する…」など、これらを公言して、農地改革を断行したのである。

「農地改革」の骨子案

- ◆ 小作料は、金納に改める。
- ◆ 不在地主の所有する全小作地、及びその他の地主の3町歩を超える全小作地を耕作者に強制譲渡する。
- ◆ 地主と非地主の利害を平等に代表する農地委員会を再組織して、小作料の適正化、自作農創設の斡旋に務める。

「松村謙三の強調したこと」

地元の地主をはじめ、全国の地主の抗議に対して、農地改革は、食糧事情改善のためにも、農村の政治的不安の除去による日本農業の基礎固めにも重要であることを強調し続けた。

昭和20年(1945年)12月18日、「農地調整法改正法案」として、国会で可決された。これが第一次農地改革である。次いで、GHQの勧告を踏まえて第二次農地改革へと進んでいくのである。

新生日本の黎明は、松村謙三によって告げられたといっても過言ではない。



松村謙三は、農民の幸福のために、農地改革を断行し、政界の浄化のために、金権に対抗し、国家の自立のために、「日中国交回復」を悲願し、自己維持のために、清貧に徹して、生涯政党政治家を通した偉大な越中人であった。

刀利村の史話

～刀利ダム記念公園「懐郷」の記念碑より～

通称、刀利谷は、五ヶ村をいう。

小矢部川の上流より、下小屋、中河内、滝谷、上刀利、下刀利の五集落であった。

昔は、加賀藩であり、戦国時代の藩武者が住み着いたものと信じられている。当時この地は、金沢より、刀利、西赤尾、白川越えて、尾張に通じる重要な街道で、飛脚、武士、行商人等の往来であった。要所には、関所があり、逃亡者を見張っていたと言われている。

刀利には、蓮如上人の巡回布教の史蹟もあり、集落はそれ以前からあったものと思われる。村民には、一向一揆に参加した若者もあり、信仰心厚く、全戸が浄土真宗大谷派であった。

明治15年(1882年)東本願寺建立に際し、鎮守白山神社の大櫓(おおげやき)目周り一丈余、長さ七間四尺の巨木を献上している。

昔時は、稗(ひえ)、粟(あわ)が主食で、人口の増加に伴い、食糧は不足を極め、明治年間、北海道へ移住した者も少なくない。

次第に田地を開き、炭焼き、養蚕などで生計を立てていた。

村の発展を希う住民は、石川県に比べ、富山県側の道路が悪かったので、大正13年(1924年)、ようやく車道に改良した。これによって、この山村も物資、文化に恵まれ、物・心共に進展を遂げた。

特に木炭は、量、質ともに県内外から屈指の生産地とし認められたのである。

これは、住民の勤勉は元より、当時在住久しい小学校教師「山崎兵蔵」先生の薫陶・助言も忘れてはならないことである。

この山中の桃源郷に、時あたかも昭和33年(1958年)、国家の大計として、刀利ダム建設が決定、滝谷、上刀利、下刀利の参村は、存続の願いも虚しく、湖底に姿を消してしまったのである。そして、奥地に残された下小屋、中河内も離村もやむなきに至り、ここにおいて、先住民の伝説に始まり、小矢部川最上流の谷あいには肩を寄せ合っながら来た、刀利千年の歴史は、幕を閉じたのである。

平成5年8月吉日



～福光木工業の将来にかけた人～

歴史資料



村謙三・井口仁志

太平木工株式会社の創立

現在、隆盛を誇っている南砺市福光町の木工業は、大正元年(1912年～)に始まったのである。

福光地方の木材資源に着目し、郷土の産業として将来をかけた人に松村謙三・井口仁志・菊池素空の三名が挙げられる。

松村と井口は郷土人であったが、菊池素空は京都陶磁器試験場長であった。

そこで菊池場長が欧州視察から持ち帰った農民工芸(児童玩具類)の製作が大正2年頃から福光で試みられたのである。

この事業を助けた人物として、桜井宗一郎、砂土居次郎平、安念次郎左衛門、尾山善次郎などもかかわっている。

松村と井口は、二人の頭文字を取って、MI商会を立ち上げた。これこそ、「太平木工」の前身であり、現在も栄えている福光木工業の起源なのである。

大正5年(1916年)、MI商会も業務の拡張に迫られ店名をチルドレン商工会福光工場と改名する。

大正13年(1924年)、群小工場を吸収し株式会社組織とし「太平木工株式会社」をスタートさせたのである。

初期は、木製挽物玩具が主であったが、その後、紡績用、絹・人絹用各種木管や運動具の製造も行われ、輸出産業にまで発展したのである。

第二次大戦によって、太平木工も日本滑空機工場と連携をするが、終戦と共にスポーツの隆盛時代が到来し、木製運動具の製作が急速に伸びるのである。

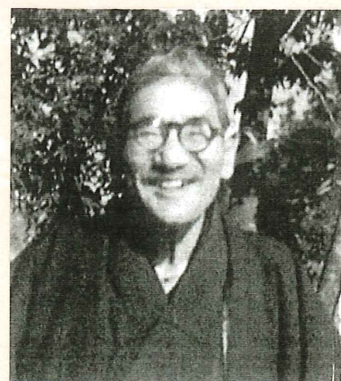
昭和25年度には、「株式会社波多製作所」が大きく成長し野球バッド、スキー、テニスラケット、バドミントンラケットなどの木製品の生産が、全国生産の7割を占めるまで成長した。



太平木工 玩具の製作状況



松村謙三



井口仁志胸像

農地改革と日中友好に努めた

松村謙三

まつむら
けんそう

物語

